

倫理 第42回「他者への奉仕と生命 ～現代のヒューマニズム～」

○今回のポイント

20世紀の戦争・暴力・疎外の時代に際して、人間性の擁護と解放をかかげるのが現代ヒューマニズム！！

1. 【① マザー=テレサ】

- ・カトリックの修道女としてインドで貧民のために奉仕活動
- ・精神的なケアが重要という認識から「② 死を待つ人の家」というホスピスを開設。見捨てられた余命短い人を引き取り、最後を看取る。

†「恵まれない人々にとって必要なのは多くの場合、金や物ではない。世の中で誰かに必要とされているという意識なのです。見捨てられて死を待つだけの人々に対し、自分のことを気にかけてくれた人間もいたと実感させることこそが、愛を教えることなのです」†

※【③ ホスピス】って何？～生命倫理のおはなし～

⇒治療の見込みのない末期患者の苦痛を取り除き、最後の時間を有意義に過ごさせ、安らかな死を迎えさせるための施設。

・【④ QOL】(Quality of Life) : クオリティー・オブ・ライフ、生命の質

⇒【⑤ ターミナル・ケア】(終末医療)の重視…苦痛の緩和や精神的ケア

a. 尊厳死(消極的安楽死)…延命治療を停止すること(自然死)

b. 安楽死(積極的安楽死)…薬物投与や自殺などで人為的に死なせること

※オランダなど一部の国では安楽死は法的に認められているが、日本では尊厳死のみ認められる。

2. 【⑥ レヴィナス】

☆他者との倫理的出会いを突破口として自己の内在的世界から無限への脱出を説く

ユダヤ人として強制収容所に送られ、親族を皆殺しにされる

↓

西洋哲学では、「自己」を中心にして存在を「全体化」し、その全体性の世界に固執して他者からの呼びかけに耳をふさぎ、他者に暴力をふるう。

↓

圧倒的な暴力に満ちた世界で、真の倫理の可能性を示すにはどうすればいいのか？

↓

レヴィナスは【⑦ 他者】を倫理の中心に据える

(※【⑧ 他性】…他者のもっとも基本的な性格は、「私」とは根本的にあり得ないということ)

↓

他者は自己の世界を根本的に超越した【⑨ 顔】と呼ばれる存在であり、貧困・暴力・死の恐怖におびえながら「私」をみつめ「汝殺すなかれ」という倫理的命令を呼びかけてくる。

※【⑩ 顔】…自己にとって絶対的に他なるものとして迫ってくる他者を指す。

↓

「私」は自己の利益と享受をこえて、他者を倫理的に迎え入れ、他者の苦痛に責任を持つとき、無限の世界へと開かれて、倫理的主体となる。

3. 【⑪ シュヴァイツァー】『水と原生林のはざままで』

☆キリスト教的な奉仕の実践者

- ・アフリカで医療活動と伝道活動に従事
- ・生命への畏敬を基礎に、自然界のあらゆる生命を尊ぶべきことを説き、反核・反戦運動にも従事。

※【⑫ 生命への畏敬】

⇒生きることと生命あるものすべてを、価値あるものとして尊ぶこと。生命とは、神に通じる神秘的なものであり、生きんとする意志を敬うところに、普遍的な人類愛と倫理の核心がある。

※【⑬ 生きようとする意志】

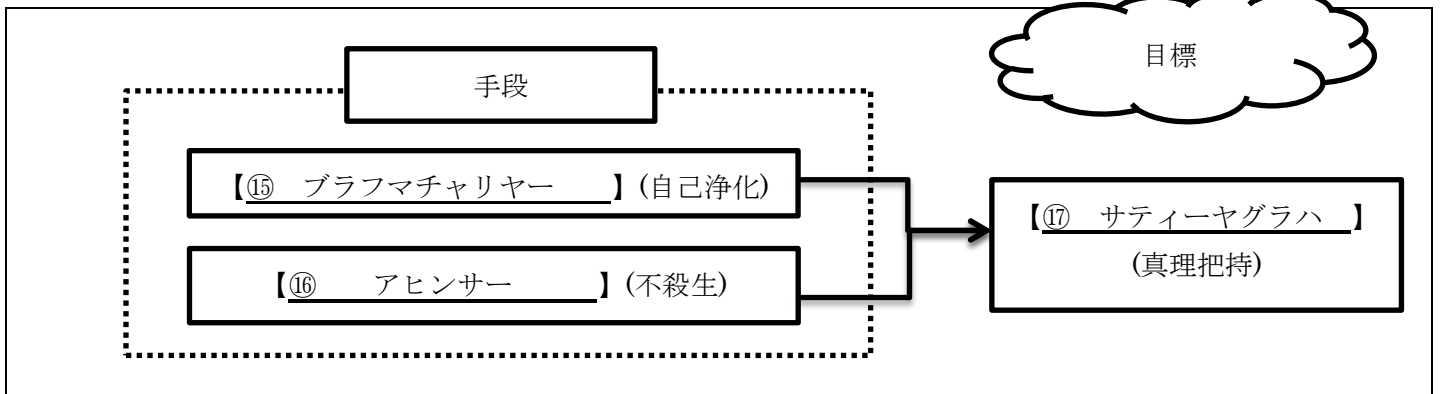
⇒すべての命あるものが持っている本質的な意志。シュヴァイツァーは、「**自分はいきようとする生命に取り囲まれた、生きようとする生命である**」という事実から出発し、この「生きようとする意志」の生命の素朴な肯定を、倫理的な自覚に高め、倫理的責任を負うべきだと説いた。

4. 【⑭ ガンディー】

☆インド独立の父

- ・非暴力・不服従運動により、イギリスからのインド独立運動を指導。
- ・インドの伝統であるアヒンサーなどにもとづき真理を追究
- ・ヒन्दゥー教とイスラーム教が融和した統一インドの独立を主張したが、結局分離独立し、暗殺された。

☆インドの独立運動と宗教的な真理追究と統合



※【⑮ ブラフマチャリヤー】

⇒「自己浄化」と訳される。性欲をはじめとして喜怒哀楽など一切の感覚を統制し、真理のみをひたすら探究する心構えを確立すること。晩年のガンディーは毎晩同時に複数の女性と裸体で同衾しており、弟子たちから批判を受けたが、性欲を統制下においた行為だとして批判を退けた。

※【⑯ アヒンサー】

⇒「不殺生」と訳される。すべての生物を同胞とみなし、肉食禁止・戦争放棄を説く。あらゆる虚偽・不正・不合理を許さず、一切の生けるものへの愛情を実践する。

※【⑰ サティヤーグラハ】

⇒「真理把持」と訳される。ガンディーの最終目標。真理を把握し、それを社会の中に具現化していく。その手段として要請されるのが、ブラフマチャリヤーとアヒンサーである。